京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

# 現代科学・技術・芸術と多元性の問題

PaSTA

Plurality and Science, Technology, Art

# Newsletter

**No.18** (2007/01/05)

本年度第二通目になります、PaSTA 研究会ニューズレター（第 18 号）をお届けします。今号では、7月第二週目以降に行なわれた二回の研究会について、ご報告します。

## 活動報告

### ◇ 第 37 回 PaSTA 研究会：フランス哲学のコンテキストにおけるベルクソン

**日 時：** 7 月 16 日（日）午後 2:00～6:00
**場 所：** 京都大学文学部東館 4 階 COE 研究室
**報 告：**

**三宅岳史 氏**（文学研究科哲学専修 OD）
**「計算不能なエネルギーと非決定性の座としての神経系」**

**鈴木泉 助教授** (東京大学大学院人文社会系研究科)
**「ネオ・モナドロジーの系譜 ― その二つのライン ―」**

**杉山直樹 助教授**（学習院大学文学部哲学科）
**「ベル・エポックのフランス哲学とプラグマティズム ― ベルクソンとその周辺から」**

**発表要旨：**

## 「計算不能なエネルギーと非決定性の座としての神経系」

**三宅 岳史**

本発表では、ベルクソン哲学に現れる計算不可能なエネルギーという概念を、当時の生理学や神経研究をめぐる科学的・哲学的なコンテキストから解明するという作業を行った。19 世紀前半から始まった数値化や計測への熱狂は、その世紀末には自然・社会科学に広く行きわたり、熱狂的な賛同と反発を共に引き起こしていた。ベルクソンの『試論』にもその影響は見られ、そこでは質的多数性が計測や数値化を拒むのと同時に、数的多数性はそれらを全面的に受け入れている。問題は、ベルクソンが神経現象の研究が進めば、計算に適しない新種のエネルギーが見出されるかもしれないと述べているところにある。この問題となる概念は、延長を有する神経系の研究から見出され、さらに科学の一部門である生理学の対象となるという点で、計算不能ということから質的多数性に単純に帰属させることはできない。（したがってこの概念は単に反科学的なものではない。）

またこの計算不可能性は、当時の物理学者ブシネスクが示したような議論、すなわち、特異解をもつ微分方程式では運動体の軌跡が複数に分岐し、その一つの軌跡を選択する力が、物理・化学的には静力学的にも、動力学的にも計測不可能だという議論とも異なる。それというのも、『ベルクソン講義録』II では、ブシネスクを批判するブートルーの議論が敷衍され、偶然性と近似による非決定性や計算不可能性が導入されるからである。

さて、『物質と記憶』では、『試論』では扱われなかった心身結合の問題が論じられ、そこには当時の生理学の文献が多く引用されている。とりわけ、神経現象の研究では、連続説と非連続説が当時は対立していたが、非連続説の立場に立つピュパン『ニューロンとその機能の仕方に関する組織学的な仮説』が『物質と記憶』で引用され、このテクストに現れるいくつかの重要なテーゼが『物質と記憶』にも取り入れられている。それは神経系が非連続であると見なすことで、神経は刺激に応じて、お互いの端を自由に結合することが可能になり、神経系は偶然的に変動する交通網のようなものであるという主張である。当時の神経研究の非連続性が、『物質と記憶』の非決定性の座としての神経系という主張を補強しているのである。ただし神経系の非決定性を可能にするはずの、計測不能なエネルギーの働きは『物質と記憶』ではまだ明らかにされず、『創造的進化』によってようやくその非決定性と測定不能性の関係に一応の説明が与えられるのである。

1. 当時の時代背景（数値化・計測化の熱狂、科学万能主義とその反発）
2. 試論の持続の計測不可能性と計算不能なエネルギーとの違い
3. ブシネスクの試み（物理的決定論と生理学における自由との調停）との違い
4. ピュパンの神経現象の研究史（連続性から非連続性、非連続性と偶然性）
5. 神経の研究の『物質と記憶』への影響（非決定性の座としての神経と計測不能なエネルギー）

## 三宅岳史 氏（企画者）のコメント

今回の研究会で、企画者として念頭にあったことを示し、それに対するいくつかの結果や反省を述べてみたいと思います。まず、「フランス哲学のコンテキストにおけるベルクソン」というタイトルですが、これはまず第一に、ごくありきたりな言い方をすると、ベルクソン哲学を複数のコンテキストにつなぐことでその多面性を示す、ということが企画者のねらいとしてありました。この点では、杉山先生がプラグマティズム、鈴木先生のネオ・モナドロジー、三宅の実証科学（今回はブシネスクの理論物理学とピュパンの神

経研究）という三つのラインはかなり明確に出ていたのではないかと思います。

杉山先生が行為ということ基軸にしながら、ミヨーとデュエム、ル・ロワ、ブロンデルそしてベルクソンという多彩な顔ぶれを並べて、彼らを無理矢理ひとつの型に押し込めるのではなく、個々の哲学者たちの逸脱や過剰を丁寧に掘り起こしていく作業は、少なからず知的興奮を刺激するものだったと思います。プラグマティズムが、科学から宗教にまで至る長い射程をもち、科学批判を内在的に含みつつ科学論を展開したという複雑で微妙な側面が個人的には勉強になりました。

鈴木先生のネオ・モナドロジーの系譜も、ライプニッツは言うまでもなく、タルド、ドゥルーズそしてベルクソンという、劣らず多彩な顔ぶれをどう位置づけるかという問題提起的なものであり、ベルクソンの研究史という観点からすれば、ドゥルーズによるベルクソン論が画期的なものでありつつも、その後、その粗雑で不毛な模倣論文が大量に出現しただけであったという不幸な歴史を鑑みると、このコンテキストが真に何らかの生産的な関係をもたらしてくれるのではないか、という期待を十分に感じさせるものだと思います。

三宅のベルクソン哲学と実証科学の関係に関しては、古くから言い尽くされてきた感が否めませんが、それでもこのような細部にこだわって「老人くさい？」仕事を続けるのは、やはり先行研究に粗雑な同語反復が多く、テクストに分け入った綿密な研究がほとんど皆無に等しいと思われるからです。しかし、今回の研究会では会場で交わされたJ.タンヌリの人脈の話などは全然知らず、まだまだ自分が無知であり、綿密さにおいても不十分であるということを実感しました。

さて、このようなコンテキストを示す意義や成果はどのようなものか、ということを少し示して、コメントを締めくくりたいと思います。杉山先生が『創文』(2005年1-2月号)で述べられているように、従来、ベルクソン哲学は敷居の低い哲学であるかわりに、袋小路に行き詰まり易い哲学でもありました。それは、1930年代に一度〔流行思想として〕葬られ、1940年代にもう一度現象学によって〔哲学として〕葬られた、という中田光雄氏の指摘（『現代思想』の1994年9月臨時増刊のベルクソン特集の中村雄二郎氏との対談）に加え、先ほど述べたドゥルーズによるベルクソン再評価も、その解釈が模倣されて生産力がたちまち失われたという事態が示していることでもあります。そして再び、新資料の発掘などによって、ベルクソン・ルネッサンスの機運が高まっている今日、過去の轍を踏まないためにはどうすればよいのでしょうか（杉山先生が『創文』で指摘されているユードのように）。

たとえ今日の「ベルクソン・ルネッサンス」が一過性のブームで終わってしまったとしても――もちろん、ベルクソン研究者としては避けるべき事態ですが――、命脈を保つような生産力を有するラインを構築すること：これがコンテキストをつくる、というこの研究会の第二のねらいになります。今回の研究会は、そのようなコンテキストをはっきり構築するまではいかないものの、その可能性や方向性をわずかながらでも提示することができればというのが、企画者の隠された、しかし本当のねらいでした。これが成功するかは、それこそまだ誰にもわからないことですが、デカルト哲学のような分厚い解釈の伝統がないベルクソン哲学にとって、このことが真の古典となれるかの賭け金になるのではないか、と個人的には考えています。

今回企画を薦めて下さり、そのうえ司会を引き受けて下さった出口康夫先生、ご多忙な時期にもかかわらず快く発表のご承諾をいただいた鈴木泉先生、杉山直樹先生に心から感謝を申し上げます。また、小林道夫先生をはじめ、途中で雷雨も振る中、ご参加して下さり、活発なご質問をいただきました参加者の皆様、そして、とりわけ、連絡や事務手続きの点で多大なご迷惑をおかけした佐野勝彦氏に改めてお礼を申し上げます。

# 「ベル・エポックのフランス哲学とプラグマティズム――ベルクソンとその周辺から」

**杉山直樹**

ウィリアム・ジェイムズの『プラグマティズム』(1907 年)の短い序を開くと、そこにはプラグマティズムへの手引きとなる書物がいくつか列挙され、そしてフランス人としては、ミヨー(G. Milhaud)、ル・ロワ(É. Le Roy)、そしてブロンデル(M. Blondel)たちの名が記されている。そこにベルクソン――『プラグマティズム』仏訳に序文を寄せたジェイムズの友人――の名を加えてもよいだろう。しかし、いわゆる「フランス・スピリチュアリスム」のラベリングを受けがちなこうした思想家たちが、なぜ同時にプラグマティズムの先導者でもあったのか。本発表では、その背景をさぐりつつ「プラグマティズム的運動」(レネ・ベルトロ)という観点から、この時代のフランス哲学についていくぶんかの回顧を行った。

(1) 当時のスピリチュアリスムにとっての大きな敵は「決定論」であり、それを事実の名において強要してくる自然科学的認識であった。この時期に広く見られる、決定論批判や科学批判の動機は、ひとまずそこに求められる。問題なのは、決定論的世界観に余白を用意し、そこに従来の精神の存在を、またその自由を、さらには目的論的秩序の支配を、保持しようというモチーフなのであった。

(2) ここで多くのスピリチュアリストの関心を惹いたのは、科学における「規約」的要素の重要性、という論題であった。幾何学の規約性を指摘し非ユークリッド幾何学の権利を主張したポアンカレは、同時にまた物理学における根源的な規約の構成的かつ積極的な役割を指摘した科学論者でもあった。時間の数量的計測はそれ自身が等質的な時間を構成する規約の所産であり、慣性の法則ならびに保存則といった基本法則は、経験からの抽象であるよりも、諸々の実験と観察を可能にしつつもそれ自体は検証不可能な「規約」である。非延長的な度を外延量に転記する操作の規約的性格を指摘する考察も当時、他にもJ. タンヌリ、そしてデュエムなどにおいて、広く見られたものである。こうして科学認識は、単純な事実の反映である以上に、一定の構成物として理解されるのである。また特にデュエムが強調することだが、科学理論は経験的事実のそのままの描写ではあり得ず、理論と事実の間には一対一対応はなくむしろ一定の隔たりがあり、それゆえに理論については単純な反証もなされ得ない。しかも同時に、論理的に絞り込めない可能な諸理論の間での選択はなされているのであって、そこには「良識」等と呼ばれる基準を用いた、ある種実践的な介入があることが明らかになる。

(3) 以上の経緯をスピリチュアリスト的関心から描写し直すならこうなる。――決定論を唱える科学理論そのものが、別の審級によってそのように規定されているのであって、この先行的審級こそが、精神(エスプリ)の場所なのである、と。ここで同時に気付かれるのは、このようなルートを通じて用意される精神は、ことの次第から言って、さまざまの選択を自ら行いながら認識を構成していく、そうした実践的主体として規定されることになる。それは、科学的認識を利用しての製作的実践というよりも、まずもってさまざまの規約を設定し、可能な諸理論の間で選択を行い、科学的認識そのものを構成する、そうした実践である。ジェイムズが名を挙げた哲学者は、この観点を共有している。彼らは、科学を一つの「プラグマ」として理解し、ここを立脚点として精神の能動性と自由を確保しようとしたわけである。

(4) もちろんこの上で、個々の思想家が特にどういった方向へと考察を展開したかについては、いくつかのヴァリエーションを指摘できる。比較的ニュートラルなミヨーの立場に対して、ル・ロワやブロンデルは、「行為」全般がある超越へと方向付けられているという論点をさらに加えながら、宗教哲学へと歩み出す。ベルクソンは、(少なくとも前期においては)「行為」をむしろもっぱら実在認識への障害として批判排除し、それ以前に与えられている経験――「直接与件」――に目を注ごうとする。ただそれにしても、多様な議論が位置づくトポスそのものは一つである。本発表はそうした共通の主題系から発する拡がりを通覧し、この時期におけるスピリチュアリスム、科学論、そしてプラグマティズムの一種逆説的な重なり

の存在を確認することに努めた。

## 杉山直樹教授　コメント

久しぶりの夏の京都でした。激しい夕立にもなりましたが、そんな中お集まりいただいた方々、そしてとりわけ会を運営されている出口、水谷両先生にはお礼を申し上げたいと思います。

ベルクソン哲学のコンテクストということで、あまりそれとして紹介されることのない当時の思想家たちを大雑把に見渡すという作業でしたから、おそらくは参加者の方々に耳慣れぬ話題ばかりあれこれ長々とお話ししてしまったようです。ただ、この時期フランス哲学で一種のオブセッションのように繰り返し口にされる「行為 action」や「偶然性 contingence」の語にどういった賭金が積まれていたのか、同時に発表された鈴木先生、三宅さんの発表からもあらためて確認し、再考する機会になったのは私にとってありがたいことでした。決定論に抗して、固有の自由において能動的に行為をなす個体的精神を保持し、それらに複数性を確保すると同時に調和的目的論や超越的統一にも余地を残そうというこの時期に特徴的な議論は、それぞれが確かにモナドロジーのある種の継承と見ることができます。そしてその「ある種」の諸様態を分析することで、この時期の諸思想についてまた一つ興味深いマッピングが可能であることは確かだと思われますし、またそうした文脈においてタルドは際立って問題的な位置を占めるだろうことも疑いのないところです。

また「自由と決定論」と言ってしまえば非常に一般的な看板になってしまいますが、思想史的な詳細に立ち入って見れば、実に複雑な議論の錯綜があり、簡単にこちらの図式から整理するわけにはいかないディテールに満ちているという（考えてみれば当たり前の）事実を三宅さんの発表は再確認してくれるものでした。この会合に私を誘ったのは三宅さんですが、はじめは確か博士論文準備中の三宅さんの様子を伺うという話だったような気もします。特に日本においてはほとんど手つかずの研究領域ですし、お仕事の進展をお待ちしたいところだと強く思いました。

## 「ネオ・モナドロジーの系譜――その二つのライン――」

**鈴木泉**

本研究会を通して考えてみたかったこと、報告の内容、そして今後の開かれた課題について簡単に纏めて、報告に代えることにしたい。私なりの言葉で言えば、ベルクソンの思索を＜フランス・スピリチュアリスム＞や同時代の科学思想を初めとする哲学史・思想史的背景との＜連続性/断絶の解釈学＞において捉えることが、本研究会全体の課題であったが、近世哲学の研究者として言わばアウト・サイダーである私は、ここ数年密かに抱いている哲学史的な作業仮説の提示を通して、ベルクソン研究に関してもなにがしか遠くから寄与出来るのではないか、と考えた。すなわち、大合理主義哲学の四人の哲学者、デカルト・マルブランシュ・スピノザ・ライプニッツという抗争関係にある体系を解読格子として捉えること、具体的に言えば、主体性と超越/現象学の先駆/内在性の哲学/複数の意味におけるモナドロジーの哲学、という四つの解読格子を設定することによって、それ以降の哲学にも光を当てることが出来るのではないかという作業仮説を念頭に置きながら、それらの変奏の中にベルクソンの哲学を据えてみた場合にその哲学の特異性がどのように見えてくるか、ということを最終的には目指そうと思った。その際、『試論』第三章の自由論や『物質と記憶』第四章の議論を見る限りで、一番の親和性を有するのはライプニッツの思索だと思われるが、その関わりで興味深いのは、19世紀から20世紀にかけての幾人かの哲学者たち

が自らの哲学に対してモナドロジーないしはネオ・モナドロジーというキャッチ・フレーズを与えているという事実である。フッサールが自らの間主観性論にモナドロジーという名を冠したことはよく知られているとして、晩年のルヌーヴィエの新・モナドロジーからマイナーではあるもののネドンセル（Nedoncelle）のモナドロジー、或いは、ブロンデル哲学の端緒に晩年のライプニッツの「実体的紐帯」に対する議論があったことなどを考え合わせると、この時期の哲学にネオ・モナドロジーの系譜とでも呼ぶべき思索のラインが考えられるのであり、それらの中にベルクソンを位置づけられないか、というのが、今回の報告を主導する仮説であった。

だが、このネオ・モナドロジーは、神学を背景に有する予定調和を排除しつつも、複数形において語られねばならず、少なくとも、1/「宇宙を粉末にする」ようなタルドからドゥルーズに至る系譜、2/心身の直接的な関係を主軸とするようなビランからミシェル・アンリに至る系譜、3/デカルト的と言われるような自我論を間主観性へと開いていく一連の系譜、といった幾つかの異なる動機を抱えたラインが見出される。そこで、今回の報告では、1/のラインの端緒に位置する----ベルクソンも賛辞を捧げている----ガブリエル・タルドの＜ネオ・モナドロジー＞の哲学的な枠組みを概観しながら、＜ネオ・モナドロジーの系譜＞に関する議論の端緒を開こうと試みた。

このような仮説自体を十分に展開することは出来ず、ベルクソン哲学のプロのお二人による、同時代の哲学史・科学思想史をコンテクストにおいた魅力的な研究にただただ学ぶだけであった。19 世紀後半以降の哲学の或る側面を、上に述べた四つの体系の抗争関係の変奏として見た場合に何が見えて来るか、という作業の始まりの提示の場を提供してくださったことに研究会の皆様に深く感謝したい。

**三宅岳史氏**

**鈴木泉 助教授**

**杉山直樹 助教授**

**討議の様子**

## ◇ 第 38 回 PaSTA 研究会：Mark Siderits　教授講演会

**日 時：**7 月 22 日（土）午後 2:00～5:00
**場 所：**京都大学文学部東館 4 階 COE 研究室

**発 表：** **Prof. Mark Siderits** (Illinois State University)
**"The Logic of Emptiness"**

発表要旨：

**"The Logic of Emptiness"**

**Prof. Mark Siderits**

Religious discourse is often paradoxical. The subject of my talk was the explicitly paradoxical statements one finds in Buddhist texts of the Madhyamaka school. Such statements, as for instance 'The nature of all things is to be devoid of nature', are clearly contradictory in form: they explicitly deny what they either assert or presuppose. When someone utters a statement that is clearly contradictory in nature, what they say is evidently false. Their uttering such a statement thus openly flouts the convention that we should utter only what we take to be true. It is then up to the audience to work out how to interpret this violation of the rules governing conversation. One possibility in the context of religious discourse is to interpret the utterance apophatically: that the speaker intends to convey the point that the transcendent (which is presumably the object of religious discourse) is beyond the representational capacities of discursive rationality.

In the Buddhist context, however, there is evidence that the apophatic interpretation is inappropriate. For Buddhist texts frequently contain what appear to be contradictions–namely denials of both a given assertion *p* and its negation not-*p*. But such apparent contradictions are said not to be genuinely contradictory insofar as the intent is to reject a presupposition that both *p* and not-*p* share. Applying this hermeneutic device to the case of Madhyamaka paradoxes yields a semantic anti-realist interpretation of the Madhyamaka doctrine of emptiness: the denial that coherent sense can be made of the notion of verification-transcendent truth-conditions.

This interpretation, like the apophatic interpretation of the doctrine of emptiness, depends on the assumption that all contradictions are false. Some would question this assumption. Dialetheism is the view that there may be true contradictions. It recently emerged as a result of the development of systems of logic that block the derivation of any proposition whatever from a contradiction. The chief reason for saying that contradictory statements must be false is that, by the rules of classical logic, any statement whatever can be derived from a contradiction, so its truth would absurdly lead to the acceptance of anything and everything. Dialetheists claim that since this absurd consequence is blocked, there may be contradictions that are true. Graham Priest and Jay Garfield claim as well that the Madhyamaka doctrine of emptiness is best interpreted dialethically: the doctrine yields contradictory statements that truly describe the ultimate nature of reality. This interpretation differs from the apophatic interpretation in that the latter claims the ultimate nature of reality is ineffable, while the former says it is truly described as contradictory in nature. It also

differs from the anti-realist intepretation in that the latter claims that the expression ‘the ultimate nature of reality’ fails to refer, while the former says that it refers to something with a contradictory nature.

## PaSTA 関連研究会：哲学系若手研究者育成プロジェクト研究会のご案内

哲学系若手研究者育成プロジェクト」(略称: プロジェクトΦ) の第 3 回研究会に関してご案内します。

### ◇ プロジェクトΦ第 3 回研究会：
### 結局「意義」とはいったい何なのか　ーダメット版フレーゲの再検討

**日 時**： 2007年 1 月 13 日 (土) 午後 2:00～6:00
**会 場**：京都大学文学部東館 4階 COE 研究室
**企 画&司 会**：**大西琢朗 氏** (京都大学文学研究科 博士後期課程 哲学専修)
**講 演**：

**金子洋之 教授**　(専修大学)
**「フレーゲの『意義』とダメットの『意義』」**
**松阪陽一 助教授**　(首都大学東京)
**「フレーゲの『文法』と意義の構造」**
**藤川直也 氏**　(京都大学文学研究科 博士後期課程 哲学専修)
**「エヴァンズの単称思想の理論について」**

発表の概要については、http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/pasta/ypp.html#070113 をご覧ください。

---

## 編集後記

7月二週目以降に行われた二回の研究会では、講演していただいた司会の三宅岳士氏及び先生方から、研究会終了後にディスカッションを振り返ったコメントを頂き、今号の Newsletter に掲載することができました。研究会後にも、多大なご協力をいただいたことを、この場をお借りして、衷心より御礼申し上げます。 次回の PaSTA 研究会の予定は現在の所ありませんが、今号の Newsletter でもご案内しましたように、2006 年 11月から、PaSTA 関連研究会として、哲学系若手研究者育成プロジェクトを開催しております。 (佐野 勝彦)

PaSTA 事務局
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
現代文化学共同研究室 (担当：佐野)
Phone: 075-753-2792
E-mail: pasta-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp
Webpage: http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/pasta/